

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：14403

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20264

研究課題名（和文）米国における表現主義ライティングの理論と実践

研究課題名（英文）Theory and Practice of Expressive Writing in the United States of America

研究代表者

森本 和寿（Morimoto, Kazuhisa）

大阪教育大学・教育学部・講師

研究者番号：70909837

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アメリカ合衆国（米国）の自己表現を重視するライティング教育（表現主義）がどのような理論と実践を展開したのかを検討し、日本のライティング教育への示唆を明らかにした。近年、ルーブリックを用いた評価に注目が集まっているが、本来の「真正の評価」論の趣旨とは異なる形でルーブリックだけが一人歩きした「ルーブリック評価」が広まっている。ルーブリックやレポートの「型」に従順に書くことに焦点が合わせられ、アカデミック・ライティングにおいて育成が目指されているスキルや思考力等が妨げられている。米国での議論を手がかりとして、表現を起点としたライティングにおける指導的評価の可能性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究は、米国リテラシー教育の「論理的」「学術的」とされる指導の側面に焦点を合わせてきたことが特徴として挙げられるが、これに対して本研究は、表現的、個人的な文章指導の側面に光を当てるという点に独自性をもつ。さらに、米国の表現的なライティングを検討するにあたり、教育方法学において蓄積された知見を参照しながら、具体的な教材や授業、教室内のダイナミズムまでを射程とする実践的な観点からの分析を行う点も、本研究の独自性である。日米ライティング教育を比較検討することで、現代における新しいカリキュラム、授業、評価方法を具体的に構想・提起することまでを射程とする点が、本研究がもつ学術的・社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：This research investigates the expressivism approach to the teaching of writing education in the United States and its relevance to Japan. The study explores the theory and practice of self-expression in writing instruction and highlights its implications for instructional writing assessment. While rubric-based assessment has recently gained popularity, the prevalent use of "rubric assessment" deviates from the original purpose of "authentic assessment" theory. This shift has resulted in a focus on adhering to rubrics and predetermined writing models, which impedes the development of academic writing skills and critical thinking abilities. Drawing on discussions in the United States, this research explores the potential of instructional writing assessment from the perspective of expression.

研究分野：教育方法学

キーワード：ライティング教育 カリキュラム研究 表現主義

1. 研究開始当初の背景

近年、米国同様、大学のユニバーサル化が進む日本の大学では、初年次教育の一環として「文章表現入門」「日本語表現法」「言語表現」等の科目が次々と開講され、現在に至るまで文章指導のあり方は日々改良されている。このような大学における文章指導では、レポート・ライティングにおいて「感想文」を書いてしまう学生の問題が強調されている。そのような学生が出てくる原因として、「日本の読み書き教育が心情把握中心の読解や、生活に根差した感情表現を中心とする感想文の執筆に終始しているからだ」という批判的言説は根強い。たとえば、日本の子どもたちは教科書が読めていないという問題意識から、文構造や修飾関係の把握に努める「論理的」な読み書きを重視すべきだという主張がなされている(新井, 2018)。

この傾向は学校のカリキュラムにも反映されている。高等学校国語科の教育課程再編に伴って「論理国語」が導入されたことが象徴するように、近年の日本のリテラシー教育においては「論理的な」読み書きを追い求める言説が一定以上の影響力をもっている。このとき、従来の日本のリテラシー教育が個人の生活的な思想・感情を中心としたことが批判の対象とされ、その対抗軸として海外では「論理的な」読み書きが大いに実践されていて、それがいかに有用であるかが説かれる。たとえば日本にとって身近でありつつ、文化の差がわかりやすい米国のライティング教育が「論理的」なものの代表として称揚されることは少なくない。

2. 研究の目的

(1) 米国の表現的なライティング教育において見過ごされている「実践の中の理論」を明らかにすることにある。日本という外の立場から米国ライティング教育を対象化することで、米国ライティング教育の中にあって米国で見落とされているものを看取することを目指す。

(2) 第二に、日米のライティング教育をつぶさに比較検討することで、大学初年次における新しいライティングのカリキュラム、授業、評価のあり方を提示することである。先述のとおり、「感情表現中心の日本と、論理表現中心の米国」という戯画的な二項対立によって日本のライティング教育改革が推進されることは多い。しかし、「感情の日本、論理の米国」という幻想の下に、思想や心情を語るライティングが軽視されれば、書き手の実存に根差した文章指導という日本のライティング教育の財産が、事実と反する認識に基づいて掘り崩されることになる。米国の表現主義のライティング教育の実践を詳らかにすることで、日米の表現的なライティング教育を比較可能な状態にし、それに基づいて新しいライティング教育のカリキュラム、授業、評価のあり方を提示することを、本研究は目指す。

3. 研究の方法

本研究では、米国における表現主義の理論と実践について、「実践の中の理論」を析出し、カリキュラム、授業形態、評価方法の意義と課題を明らかにし、新しいライティング教育のカリキュラムを具体的に構想する水準までたどり着くことを目指す。研究方法としては、文献研究と質的研究の手法を採用する。文献研究では、史資料に基づいて米国表現主義の理論と実践がどのように展開されてきたのかを、歴史的アプローチによって明らかにする。質的研究では、現代米国の教室において、具体的にどのようなライティング教育が行われているのかを、教育実践家に対するインタビューや教室での参与観察によって明らかにする。

4. 研究成果

(1) 自己表現を重視するライティング教育では、表現主体である個人の生活文脈における思いや考えが重視される。このような思いや考えを表現するもの／表現したもの、あるいはその表現の源泉となるものは、「ヴォイス (voice)」と呼ばれる。ライティング教育においては、書き手の生の「声」ではなく、その「声」を洗練されたものとして文章が伝統的に重視されてきた。しかしながら、パウロ・フレイレ (Paulo Freire) が指摘しているとおり、「疎外された人々は、依存の原因となっている構造に『組み込む』ことでは、依存を克服することはできない」ので (Freire, 1987)、社会の中で周縁化され、抑圧・沈黙させられた人々にとっては、このような伝統的なライティング教育がさらなる沈黙を招くという逆機能が生じる。「ヴォイス」が表現主義ライティングにおいて重視されるのは、このような背景を踏まえている。

このような「ヴォイス」概念はライティング教育に限らず、社会学におけるマイノリティ研究等をはじめとして広く活用されてきたものであるが、一方で、ライティング教育における「ヴォイス」概念はどのようなものであるのかは必ずしも明確に定義されてきたわけではない。そこで本研究課題では、ライティング教育における「ヴォイス」について、米国高等教育の具体的な実践を手がかりとしながら検討した。手始めとしてまず、米国における「ヴォイス」概念の形成過程を整理した。書くことにおける「ヴォイス」はプロセス運動とダートマス会議を皮切りとして米国内で影響力をもち始め、「ヴォイス」を重視するライティング教育は表現主義を旗手としながら徐々に拡大していった。しかしながら、「ヴォイス」に肯定的なライティング教育実践は、存在しない「真正な自己」を称揚して幻想の「創造性」を追究し、反知性主義を呼び込む危険性

がある点で批判された。一方で、ヴォイスを忌避する学術訓練的なライティング教育実践もまた、学問や教師の模倣を要求する過程で学生の内なる声を抑圧し、学生を疎外してしまうという点で、厳しく批判されることとなった。

以上を踏まえ、次に、アカデミック・ライティングにおける「ヴォイス」の可能性を探るため、ピーター・エルボウ (Peter Elbow) の実践において「ヴォイス」を用いたライティング教育がどのように行われているのかを分析した (Elbow, 1973; Elbow, 1981; Elbow, 2007; Elbow & Belanoff, 2003)。彼の示した単元構成と、彼の下で学生が書いたエッセイを分析することで、「ヴォイス」を用いた個人的・省察的なライティングが、具体的にどのように表現されており、その表現されたものの中で学生が「ヴォイス」をどのようにとらえていたのかを描き出すことを試みた。学生のエッセイを通して学生自身の認識に生じた変化を垣間見ると、エルボウが「声」を乗せた個人的・省察的なライティングの機会を重視したのは、それを書いた学生個人にとっての「発見」となり、自己の中の一側面 (複数の自己の中の一人) への気づきを促すからだと考えることができる。このような「声」を乗せたライティングは、そこで書かれた内容自体が学術的な新規性のある「創造性」を直接的に志向するものではないが、書いた学生にとっては省察をもたらしてくれる。学生エッセイの具体的な分析は、「ヴォイス」のある文章を書くことが、省察において書き手の実存的な問題意識を前景化させることに寄与する可能性を示してくれた。

このような「ヴォイス」を用いたライティング教育が高等教育で広く受け入れられたのは、米国のライティング教育がもつ特徴にも由来している。書くことにおいて「模倣」することや5段落エッセイ等に代表される「型」を重視することが強く求められる米国において、自己を表現すること、自分の興味関心と学術的主題を接続することは、学生にとって容易でも自明でもなかった。学生が最初からフォーマルな声で書こうとすると、言葉が硬直化し、違和感のあるものになることが多いというエルボウの問題意識は、このような米国の学生の実情に対して抱かれたものであった。特に高等教育ではフォーマルな文章を書くことが求められるにもかかわらず、どのようにすればそこに至れるのかが示されず、あるいは文章の形式面を整える指導しかされないために、一般的なライティング教育実践が学生にとって一足飛びの指導になっていたのに対して、エルボウの「ヴォイス」実践は、インフォーマルな文章執筆からフォーマルな文章執筆への足場かけのあり方を提示するものであった。

さらに言うならば、フォーマルに書くことや説得的な文章の「型」指導が、学校教育の中で徹底して行われている米国において、書き手自身の「ヴォイス」を伴うインフォーマルな文章を書くというライティング教育を高等教育において行うことが、一種の「学びほぐし (unlearn)」として機能していることもまた、一つの所以であろう。エルボウのような表現的なライティング教育が歓迎され、広く影響力をもったのは、米国において支配的な従来のライティング教育に対するアンチテーゼになっているからでもある。

(2) 個人の「声」を重視する表現主義のライティング教育は、学習者個々人の生活文脈を重視する。表現主義がもつ、このような文脈依存性の高さは、米国におけるライティング教育・研究の多様性を促してきた。一方、ライティング教育・研究の多様性は、このようなライティングを取り巻く思想にのみ依拠して保障されてきたものではなく、ライティング教育・研究の文化的・制度的背景によって規定されてきた面もある。そこで本研究課題では、米国高等教育ライティングの特徴を、その文化的・制度的背景から検討した。特に、ライティング教育・研究を担ってきた教師たち(その多くは研究者でもある)を取り巻く環境が、歴史の中でどのように変化してきて、現在どのようになっているのかを整理した。

米国では高等教育の門戸が開かれていく過程で、ライティング教育が制度的に取り入れられてきた。長らく英語英文学の一部としてライティング教育・研究が行われてきたが、修辞学や心理学、社会学等の影響を受けながら、学際的な研究が行われてきた。修辞学と作文の博士課程が拡充されたことで (図1参照)、いまだ十分とは言えないものの、制度面における自立性も徐々に獲得しつつある。大学生のためのライティング科目の設置とそのための教員確保という制度面の改革が先行した結果、ライティング研究は大学で実際にライティング教育を行う教員が担ってきた (Issacs, 2018)。このような歴史的経緯からライティング分野は、実践的学問として、あるいは学問的实践として、研究と教育、理論と実践が積極的に往還する場として発展してきた。また、ライティング分野は比較的女性参画が進んだ分野であり、それは今日まで続いている。女性比率の高さは、この分野が学術界の周縁として扱われてきた歴史

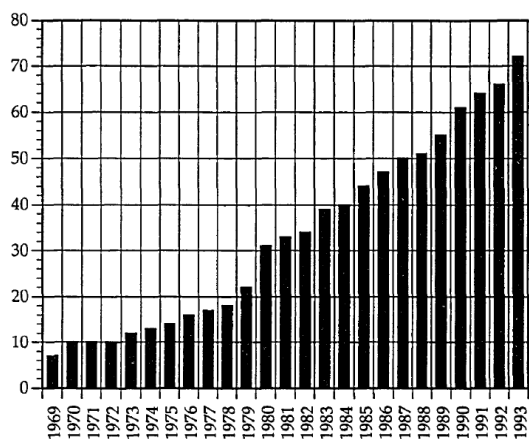


図1. 修辞学と作文の博士課程数

Brown et al. (1994), p. 241

とも関係するため、社会や学問がもつ性差別構造の影響に関しては批判的に検討する必要があるものの、各大学でライティング・プログラム統括者（writing program administrator: WPA）として女性が活躍してきたことも明らかにされてきている（図2参照）。このような女性の活躍は、ライティング分野を教育・研究の両面でジェンダー多様性に対して開かれたものにしてきた。以上より、米国高等教育ライティングの特徴を端的にまとめると、(1) 学際性、(2) 実践的学問性、(3) ジェンダー多様性という3点に整理することができる。

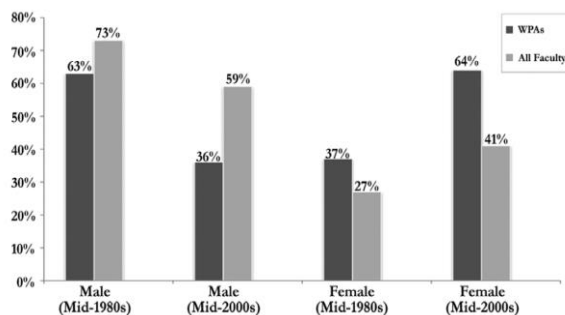


図2. WPAに占める男女比の比較
(Charlton & Rose, 2009, p. 119)

<引用文献>

- 新井紀子 2018 『AI vs 教科書が読めない子ども』 東洋経済新報社
- Brown, S. C., Mayer, P. R., & Enos, T. (1994). Doctoral Programs in Rhetoric and Composition: A Catalog of the Profession, *Rhetoric Review*, 12(2), 240-251, 253-389.
- Charlton, J., & Rose, S. K. (2009). Twenty More Years in the WPA's Progress. *WPA: Writing Program Administration*, 32(1-2), 114-145.
- Elbow, P. (1973). *Writing without Teachers*. Oxford University Press.
- Elbow, P. (1981). *Writing with Power: Techniques for Mastering the Writing Process*. Oxford University Press.
- Elbow, P. (2007). Voice in Writing Again: Embracing Contraries. *College English*, 70(2), 168-188.
- Elbow P., and Belanoff, P. (2003). *Being a Writer: A Community of Writers Revisited*, McGraw-Hill.
- Freire, P. (1987). The Adult Literacy Process as Cultural Action for Freedom. In T. Enos (Ed.). *Sourcebook for Basic Writing Teachers*. New York: Random, 158-175.
- Issacs, J. E. (2018). *Writing at the State U: Instruction and Administration at 106 Comprehensive Universities*. Utah State University Press

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 森本和寿	4. 巻 19
2. 論文標題 米国におけるライティング教育・研究のバックグラウンド：ライティング教師を取り巻く文化と制度	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究論集	6. 最初と最後の頁 78-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森本和寿	4. 巻 70
2. 論文標題 ライティング教育における「ヴォイス」：高等教育における表現と省察に関する実践的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 191-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森本和寿, 工藤健司	4. 巻 71
2. 論文標題 「子どもの論理」の現代的捉えなおし：授業分析を通じた「正しい」誤解の形成過程に関する検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森本和寿	4. 巻 20
2. 論文標題 学校教育におけるファシリテーション：それは新しい「発見」か	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学研究論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森本和寿
2. 発表標題 表現を起点とするライティングとその評価：Good Enoughな評価のために
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森本和寿
2. 発表標題 解釈学の知と実践の知：現代において「教育方法学する」とはどのようなことなのか
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森本和寿
2. 発表標題 ライティングにおける指導的評価の可能性：「ルーブリック評価」と形式主義を超えて
3. 学会等名 神戸大学 学術Weeks 2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森本和寿, 池住祐亮, 工藤健司, 末廣綾華, 大貫翔貴, 澤田崇明, 萩谷桃子
2. 発表標題 児童が育つ学習評価のあり方の実践的検討：附属池田小学校における形成的評価改善の取り組み
3. 学会等名 大阪教育大学附属学校園教員と大学教員との研究交流会（第11回）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 川地 亜弥子, 田中 耕治	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 248
3. 書名 時代を拓いた教師たち : 実践記録で紡ぐ戦前教育実践への扉	

1. 著者名 岸本智典	4. 発行年 2022年
2. 出版社 教育評論社	5. 総ページ数 356
3. 書名 道徳教育の地図を描く : 理論・制度・歴史から方法・実践まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------